



Title	「解剖」「解剖学」について - 近代中日解剖学術語の訳出と確立
Author(s)	徐, 克偉
Citation	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies, 10: 299-327
Issue Date	2017-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10928">http://hdl.handle.net/10112/10928</a>
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 「解剖」「解剖学」について

——近代中日解剖学術語の訳出と確立

徐 克 偉

On *Kaibō* (*Jiepou*, dissection) and *Kaibōgaku* (*Jiepouxue*, anatomy):

The Translations and Entrenchments of  
Anatomical Terminologies in Modern China and Japan

XU Kewei

On the acceptances and developments of Western anatomy in modern China and Japan, many scholars in the fields of the history of technology and other related research have extensively discussed. However, there are still different views on the terms of *Kaibō* (*Jiepou*) and *Kaibōgaku* (*Jiepouxue*). Some researchers insist that these two terms in modern Chinese are loan words from Japanese, but others don't think so. This paper, based on plenty of material, makes a study of their translations, formations, and entrenchments both in China and Japan, to describe a flowing around of modern Anatomy and show the cultural exchanges between these two countries in the background of Western studies into the East.

キーワード：「解剖」、「解剖学」、近代医学、中日文化交流

## はじめに

東アジアの中国伝統医学を中心とした医学体系において、解剖の実践と理論に関する記述は少なくない。例えば、『黄帝内経・靈樞・経水篇第十二』（約1、2世紀）には「若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量切循而得之、其死可解剖而視之」（若し夫の八尺の士は、皮肉此れに在れば、外より度量、切循して之を得るべし、其の死するや解剖して之を視る可し）とあり、『日本書紀・雄略天皇』（720）にも「得皇女屍、割而觀之」（皇女の屍を得たり、割きて之を觀る）という記録が残されている。しかし、近代的な学科として解剖学が発展・確立されるのは、主に16世紀以降西洋医学の影響を受けてからのことであると思われる。

## 一、先行研究とその問題点

大航海時代以降、西洋人の渡来に伴い、西洋の近代的な解剖学知識が中国、日本などの東アジアの各国にもたらされた。中日両国における解剖学の流布及びその専門用語の訳出に関しては、これまで多数の研究があり、<sup>1)</sup> 術語「解剖」「解剖学」についても、深く探求され、大きな成果が得られている。

医学研究者である范行準（1906-98）は、今日用いられる「解剖」という言葉は、元々「解部」であり、中医典籍『黄帝内経』に由来するが、誤った版本を基に日本人が訳語を作ってしまった、と指摘した。<sup>2)</sup> 氏によると、「解剖」という言葉は、中国では、元々儒者が経典を解析するという意味であり、経学の説を細かく分析して内容を明らかにすることから成立したそうである。<sup>3)</sup>

従って、「解剖」は中国の在来語であるが、一方、「解剖学」は日本からの借用語であるということが、学界では常識として認められている。<sup>4)</sup> ただし、近代以前の中国において、「解剖」は『黄帝内経』に記されているが、広く使用されておらず、20世紀ごろ、「解剖学」と共に日本語から中国語に回流した、いわゆる「日本回流借用語」(return graphic loan from Japan) であるとされる。回流の媒介といえば、イタリア人研究者マシニ氏は、1890年代に出版された『遊歴日本』『日本国志』などの文献を挙げるが、その「日源」という問題に触れていない。<sup>5)</sup> 一方、中日語彙の研究者朱京偉氏は「解剖学」の書証を1840年代の蘭学ノート『中西雑字簿』まで遡及するが、原始資料は見られず、日本人の国語学者杉本つとむ氏の調査を利用する。<sup>6)</sup> 杉本氏によると、そのノートの中に「anatomica 解剖学」という語が確かめられるという。<sup>7)</sup>

以上の学者は、各自の研究分野の中で、断片的にこの論題に触れるが、系統的な考察を行わなかった。2008年、高晞氏によって、「解剖」「解剖学」を中心とする専門研究が展開されている。氏は中医の歴史には「人体解剖」があるが、これが「解剖」という一つの学問に発展したのではない。また、「解剖」の語がのちに「解剖学」に発展したという記述もない。西洋の解剖学が最初に中国に輸入された際、「人

1) 范行准著、牛亚华校注(2012)《明季西洋传入之医学》, 上海: 上海人民出版社; 牛亚华(2005)《中日接受西方解剖学之比较研究》, 西北大学博士学位论文; 大鳥蘭三郎(1932-33)「我醫學に使用せらるゝ解剖學語彙の變遷」、『中外醫事新報』第1189號468-76頁、第1190號522-26頁; 第1191號13-22頁、第1192號69-78頁、第1193號122-28頁; 小川鼎三(1955)「明治前日本解剖学史」, 日本学士院編『明治前日本医学史』, 東京: 日本學術振興会、47-249頁; 阿知波五郎(1982)『近代日本の医学: 西欧医学受容の軌跡』, 京都: 思文閣出版; 沈国威(1996)「近代における漢字學術用語の生成と交流: 医学用語編(1)」、『文林』第30号、59-94頁。

2) [范] 行準(1936)「解剖」與「解部」, 《中西醫藥》第1卷第4期、328-30頁。

3) 范行准著、伊广谦整理(1989)《中国病史新义》, 北京: 中医古籍出版社、1頁。

4) 王立达(1958)《現代漢語中从日語借来的詞彙》, 《中國語文》第68期、92頁; 刘正焱等編(1984)《汉语外来词词典》, 上海: 上海辞书出版社、161頁。『日本国語大辞典』(第二版、2000-02)によると、「解剖学」の語誌は、1872年の『医語類聚』「Antomy 解剖学」に遡れている。初版において、字母「n」の後についた「a」がなく、再版の際では訂正されている。奥山虎章(1872 & 1878)『醫語類聚』, 東京: 名山閣、11頁; 14頁。

5) Federico Masini. (1993). *The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution toward a National Language: The Period from 1840 to 1898*, Monograph No.6 of *Journal of Chinese Linguistics*, pp.181-82.

6) 朱京偉(2003)『近代日中新語の創出と交流: 人文科学と自然科学の専門用語を中心に』, 東京: 白帝社、53頁。

7) 杉本つとむ(1978)『江戸時代蘭語学の成立とその展開 III』, 東京: 早稲田大学出版部、932頁。

身」などの言葉で解説しながら、「格体」も使用された。1840年代以降、中国の学界においては、「全体学」と称するが、「解剖」と「解剖学」の二語が日本からの借用説であるかどうかは再検討すべきである。なぜなら、当時の日本では、「解体」から「解剖」へ転向し、最終的に「解剖学」という術語を確立した。これに対して、同時期の中国において、イギリス人の来華宣教師、同文館の医学教員ダッジユン（John Dudgeon、中国名「徳貞」1837-1901）は『全体通考』（1886）という訳著の中で、既に「解剖」「解剖学」「外科解剖学」などの訳語を充分に利用し、さらに「解剖学」を公的な術語となるよう促したのである。<sup>8)</sup>しかし、ダッジユンの用語は自身の造語であるのか、それとも古典または日本語からの借用であるのか不明である。

全体からみれば、今までの研究によって、「解剖」の中国起源、「解剖」及び「解剖学」の最初の用例はおおむね明らかにされたが、少なくとも以下の三つの疑問点が残されていると考えられる。

第一：『黄帝内经』に記される「解剖」は、如何に中国あるいは日本において、西洋の解剖学と対応していったのか。

第二：日本側は、何故、如何に「解体」から「解剖」へ転向したのか、そして最後に「解剖学」という術語の訳出と確立を促したのか。

第三：中国語の「解剖学」という術語は、一体、日本からの借用語であるか、西洋人ダッジユンの造語であるか。もし前者であれば、その借用ルートはどのようなのか。後者であれば、日本語の借用など、他の可能性を如何に排除できるか。

したがって、「解剖」と「解剖学」との二語の訳出と確立をより深く探る必要がある。この二語の再検討を通じ、実証的な方法で、中日両国における近代的な解剖学の術語の借用問題を明らかにしたい。

## 二、中国側：人体を対象とする理論の思弁

西洋の解剖学が伝来する以前の中国には、人体解剖の記録や著作がある。その行為に関する「解」「析」「剖」「解剖」のような言い方が見られるだけでなく、<sup>9)</sup>解剖観察による医学作品『欧希範五臓図』（1040年代）などの作品も確かめられる。専門的な学問としての解剖学の形成と確立は西洋の解剖学からの影響を受けてからになる。

「解剖学」という術語の中国語訳の歴史については、高晞氏の考察によって、「人身」「格体」「全体(学)」などの解説・訳語から「解剖学」へ変遷したことが明らかにされた。<sup>10)</sup>ただし、解剖行為と学科名称とをより明確に区別する必要があると考えられる。なぜなら、「解剖学」という単語は学科名であると同時に、その学科不可欠の手段または方法としての「解剖」を含めているからである。両者は緊密な関係を有するが、その区別は見落すべきではない。語源を探ると、両者の間の区別は小さくない。英語を例とすれば、解剖行為は「dissect（動詞）、dissection（名詞）」で、学科名は「anatomy」である。さら

8) 高晞（2008）“‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，《历史研究》第6期，80-104页。

9) 范行准《中国病史新义》，1-15页。

10) 高晞 “‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，80-104页。

に追究すれば、学科名「anatomy」はラテン語「anatomia」に由来し、古典ギリシャ語「ἀνατομία」と対応する。このギリシャ語は「切る」「割る」などの意味を表す動詞「ἀνατέμνω」に由来した言葉であり、行為から科学名への転化過程が窺える。<sup>11)</sup> 故に高氏の研究成果を利用して、この二つの術語の中国語訳を中心に、より深く整理する必要がある。そこで高氏の詳論したことを概略し、略説または未論の内容を補充する。分かりやすく説明するために、下記の一覧表を示す。

表1 明末以降「解剖」「解剖学」に関連する術語の作品と用例

年代	作品名	「解剖」	「解剖学」	その他
1643	泰西人身説概	層剥寸割…	人身…	
?	人身図説			
1703	格体全録		格体	満州語 (ge ti ciowan lu)
1830	医林改錯	副	臟腑…	
1851	全体新論	剖骸看驗…	全体	
1886	全体通考	解剖	解剖学	
1896	西学書目表		全体学	
1901	第一份医学名詞委員会報告		体学	
1902	周礼政要	解剖	全体学	
1906	体学新編		体学	旧名「闡微」
1908	解剖学生理学訳名異同表		解剖学	
1917	医学名詞審査会第一次開会記録	解剖	解剖学	「体学」などを排除し、「解剖学」を確立
1927	解剖学名詞彙編	解剖	解剖学	

通時的な脈絡は上表の示す通りであるが、具体的にどう訳出・確立されたかは未だ不明である。また、清末以降、来華宣教師や中国人の知識人によって編纂された華英・英華辞典は解剖学の専門書ではないが、時代的な言語生活の記録として解剖学の関係用語を収録している。華英・英華辞典に見られる解剖関係の訳語を取り立て考察する必要がある。ここから、歴史の流れに沿い具体的な論考を展開してみたい。

## 2.1 明末清初における伝来と中断

管見の限り、西洋の解剖学の伝来は、西洋人宣教師による『泰西人身説概』（シュレック [Johann Schreck、鄧玉函1576-1630] 訳、畢拱辰訳 [?-1646] 潤定、1643年刊行）、『人身図説』（ロー [Giacomo Rho、羅雅谷1593-1638]、シュレック、ロンゴバルド [Nicolas Longobardi、龍華民1559-1654] 訳述）などの漢訳洋書に遡及できる。それ以降、典札論争による清政府の布教禁止までの間、西洋の解剖学の知識が順次伝来した。研究によると、上記の二作品は「人身」で「解剖学」を解説するが、「格体」を以て説明した学者もいるそうである（『格体全録』、ブーヴェ [P. Joachim Bouvet、白晋1656-1730]、パルナン [P. Dominicus Parrenin、巴多明1665-1741] 訳）。<sup>12)</sup>

11) OED 2<sup>nd</sup> Edition, Version 4.0; A Greek-English Lexicon (1940) & A Latin Dictionary (1879).

12) 高晞 “‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，80，85页；牛亚华《中日接受西方解剖学之

「人身」と「解剖学」との対応は確かに翻訳ではなく、一種の解釈・説明と言うべきである。より厳密に言えば、当時の人々は「人身説」「人身一事」などの言い方を解剖学に対応させたと考えられる。ある調査によれば、『泰西人身説概』の底本はポアン（Gaspard Bauhin、1560-1624）の名著『解剖学論』（1592）であるが、『人身図説』の底本はパレ（Ambroise Paré、約1510-90）の『人身の一般解剖学』（1561）である、という。両者のタイトルはそれぞれに「Theatrum Anatomicum In finitis Locis Auctum」[Anatomie Universelle du Corps Humain]であり、「解剖学」の意味を表す語彙（「Anatomicum」「Anatomie」）を含んでいるが、後者には「人身」（「Corps Humain」）もある。そして、人体が解剖学の最重要な研究対象として、パレの作品と同様に多くの解剖学著述のタイトルに「人体」などの用語が付いている。例えば、現代人体解剖の創始者と言われるヴェサリウス（Anreas Vesalius、1514-64）の名著『人体の構造』（1543、De Humani Corporis Fabrica）では、「解剖学」という題名を使わず、「人体」（humani corporis）という用語を利用している。従って、この二種類の漢訳洋書の「人身」という用語は厳密的な訳語ではなく、解説用語として理解するほうが良い。

畢拱辰は序言の中で、『泰西人身説概』を「亡友鄧先生人身説二卷」（亡き友鄧[玉函]先生の人身説二卷）と称す。題名の省略であるかもしれないが、人身関係の学説という意味で理解できる。学説という理解は畢氏に言及されたもう一人の西洋人の宣教師湯若望（Johann Adam Schall von Bell、1591-1666）の言葉からも傍証できる。

貴邦人士、範圍兩儀、天下之能事畢矣、獨人身一事、尚未觀其論著、不無舛望焉<sup>13)</sup>

いわゆる「人身一事」は人身のことで、つまり、人体の形態や構造に関する知識である。彼らは解剖学を人体の知識として理解していると言える。

訳書の影響を受けて初めて、中国の知識人は、医学における解剖実践の役割について再認識した。『泰西人身説概』に依り畢氏は以下のように述べる。

余曩讀靈素諸書、所論經脉絡脈、但指為流溢之氣、空虛無着、不免隔一塵劫、何似茲編、條理分明如印印泥、使千年雲霧、頓爾披豁、真可補人鏡難經之遺、而刀圭家所當頂禮奉之者、聞西士格致名流、值有殊死重囚、多生購之層剝寸剝、批郤導竅、毫髮無不推勘、故其著論致為精詳、按新莽時、捕得王孫慶、使太醫尚方與巧屠共剝剝之、量度五臟、以竹筵導其脉、知所終始、云可治病、又宋慶曆間、待制杜杞執湖南歐希範與首領數十人盡磔于市、皆剖腹剝其腎腸、使醫者與畫人一一探索、繪以為圖、事與泰西頗類、至於精思研究、不作一影響揣度語、則西士獨也。<sup>14)</sup>

比較研究》，39-60頁。

13) 畢拱辰「泰西人身説概」，鄧玉函譯、畢拱辰潤定（1643）《泰西人身説概》（出版地、出版者未詳、ローマ国立中央図書館所蔵）、2a-3b。句読点は、写本《人身圖説 泰西人身説概》（中国国家図書館所蔵）を参考、以下同じ。

14) 同上、5b-6b。

引用文によると、畢氏は、『靈[枢]素[問]』、即ち『黄帝内経』などの書籍と鄧氏の訳著と比べてみると、前者の論説は実質的な内容がなく、分かりにくい、後者は条理が立ち、明晰である、と指摘している。

注意したいのは、畢氏は漢の王孫慶と宋の欧希範と、二件の解剖実例を基に論究していることである。これらは『漢書・王莽伝』（卷九十九、王莽伝第六十九中）、『宋史・蛮夷三』（卷四百九十五、列伝第二百五十四）にそれぞれ記載されている。つまり、畢氏は史書から論拠を探し出し、解剖行為の正当性を論じている。しかし、『黄帝内経』による「解剖」も、欧希範の解剖事件による『欧希範五臓図』も上記の引用文に言及していないから、畢氏が知っているかどうか不明である。解剖行為の言い方について、畢氏は「層剝寸剝」「批卻導竅」「剝剝」「剖腹剝其腎腸」など、古代の刑罰用語を用いる。

また、『格体全録』の訳者の一人であるパルナンによると、その原著は、Dionis 氏の作品、即ち「L'Anatomie de L'homme」（人間の解剖学、1690）と分かる。<sup>15)</sup> 満州語「格体」（ge ti）を「anatomie」（解剖学）に対応させる。<sup>16)</sup> 「格」、即ち朱子学の「格物致知」であり、いわゆる「格、至也。物、猶事也；窮至事物之理，欲其極處無不到也」、<sup>17)</sup> 事物の道理を窮極すること、深く、詳しく探求すること、という意味である。「格致」という概念を西洋の自然科学と対応させるのは、マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇 1552-1610）と徐光啓（1562-1633）との協力で翻訳された時代から既に存在していた。<sup>18)</sup> 「格体」とは、人体の構造の知識を窮極することである。

しかし、典礼論争によって清政府は布教を禁止し、宣教師による西学東漸も一時的に落ち込んでいた。一言でいえば、当時の知識人たちは主に解剖学を人身・人体の構造知識として伝播・理解していると考えられる。<sup>19)</sup>

## 2.2 清末以降における再興と変動

新しい専門的な訳書が成立する前に、名医王清任（1768-1831）によって撰された『医林改錯』（1830）という作品を取り上げるべきである。西洋の解剖学の影響を受けているかどうか未だ不明であるが、王氏は確かに伝統医学の不足を認識し、実践観察を展開している。

古人の臓腑の論説や図録などの自相矛盾（「嘗閱古人臟腑論。及所繪之圖。立言處處自相矛盾」）を痛感し、四十余年をかけて疫病で亡くなった嬰幼兒（「各義塚破腹露臟之兒」）、死刑者（「剛犯」「誅戮逆

15) "Lettre du Père Parennin à Monseieurs del'Académie des Sciences, le 1<sup>er</sup> mai 1723", Aimé-Martin, M. (1843). *Lettres édifiantes et curieuses* (Tome Troisième: Chine). Paris: Société du Panthéon Littéraire, p.336.

16) 書名は漢語名詞句の音訳であると思われる満州文字列「ge ti ciowan lu」の漢字表記について、今まで「各体全録」「格体全録」「體体全録」など、三種類が提案された。また、フランス国立図書館（BnF）所蔵写本には「西醫人身脈圖説」という漢語名があるが、満州語の対訳ではない。「各体」「體体」「人身骨脈」などは、前で論じた「人身」と同じであるため、ここで重複せず、「格体」を仮定し、その可能性を提出する。渡辺純成（2005）「満州語医学書『格体全録』について」、『満族史研究通信』第4号（全文22-113頁）、27-28、36-38頁を参照。

17) 朱熹（1983）《四書章句集註》，北京：中華書局，3-4頁。

18) 徐光啓「序」、利瑪竇口譯、徐光啓筆受（1607）《幾何原本》（卷一）、4a。

19) 范行准《明季西洋传入之医学》。

屍」などの死体観察に基づき、「臟腑一事」を明らかにしよう努力した。<sup>20)</sup> ここから旧来の誤りを正そうとしたが、近代的な解剖実践を行わず、ただ不完全の可能性が高い死体を観測したそうである。それは時代条件の制限であるかもしれない。中国において、法例上では「残害死屍」（死屍を損壊）（『唐律疏議』[652] 卷十八）を禁ずる条文とその慣例があるのみならず、官民も根深い「身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也」（身体髮膚、之を父母に受たり。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり）という観念を持っていた。

王氏は近代的な解剖学に近い人体の臟腑の記述を目指す、解剖実践は欠如しているため、自身の作品を「記臟腑之書」（臟腑のことを記した書）と位置付けている。<sup>21)</sup> また、解剖に言及する際、「劓」「誅戮」のような刑罰用語を用いる。

約20年後、専門的な解剖学の訳書、いわゆる『西医五種』の第一弾としての『全体新論』（1851）が世に問われた。この専門的な解剖学の作品はイギリスの宣教師、医師であるホブソン（Benjamin Hobson、合信 1816-73）によって、撰述された作品である。初めて西洋の近代的な解剖学を伝えたものとして広く知られている。解剖学の名称と言え、タイトルが示すように「全体」と称されている。それ以降、半世紀余りの間、「全体（学）」がほぼ解剖学の通名となり、多数の著作の題名として業界の中では広く取り扱われている。例えば、『全体図説』（ダッジユン、1875）、『全体学』（直隸学校司編訳処、1875）、『全体闡微』（オスグッド [Dauphin William Osgood、柯為良1845-80]、1881）、『全体通考』など枚挙に遑がない。

それにもかかわらず、「全体（学）」は正式な訳名ではない。『全体闡微』には「Anatomical Vocabulary in English and Chinese」という解剖学語彙の対照表が掲載されているが、このタイトルの訳文は見られない。また、別の言い方を使用した学者もいる。ロンドン伝道協会の宣教師エドキンズ（Joseph Edkins、艾約瑟1823-1905）はただ「阿那多米（Anatomy），译言剖割乃割裂死物肢体，详察其内外筋骨皮肉脏腑脉络并脑气筋等质之状」と解説している。<sup>22)</sup> 1906年、ホイットニー（惠亨通、生没年未詳）「体学名目」（『体学新編』卷三）の術語表を参考すれば、「全体」の問題がよりはっきり見られる。

[English Terms] Anatomy (morphological), [新名] 體學, [舊名] 闡微<sup>23)</sup>

「全体学」と「体学」との区別は後で論じるが、編者は『全体新論』による「全体」を人体に、『全体闡微』による「闡微」を「解剖」として理解しているようである。よって、「体学」は「闡微」に取って代わる。もちろん、個人的な誤解であるかもしれないが、確かに「全体（学）」「体学」など単純な人体という意味で理解する傾向が強い。

方法・手段について、ホブソンは「人身臟腑部位，歷經剖骸看驗，故一切体用，倍悉其詳」と考えて

20) 王清任（1830）“自序”，《醫林改錯》（卷上），葉 6a-11b。出版情報未詳，北京大学図書館のデジタル版。

21) 同上，葉 5a。

22) 高晞“‘解剖学’中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，80，86-87頁。

23) Whitney, H. T. (1906). *A Glossary of English and Chinese Anatomical Terms*, Shanghai: Methodist Publishing House, p.1.

いる。<sup>24)</sup>「剖骸看驗」という用語のほかに、「割」「剖割」「分割」などの言葉を利用し、未だ統一の術語を構築していない。<sup>25)</sup> 同氏の『医学英華字積』(1858, Vocabulary of Terms Used in Anatomy, Medicine, Materia Medica, and Natural Philosophy, etc) に掲載された「Anatomy and Physiology」(解剖学と生理学) という術語対照表の中で、「全体部位功用」との訳語があるが、厳密な語意上の対訳ではなく、説明文と言える。

1886年に刊行した『全体通考』に至って、初めて「解剖」「解剖学」などを利用し、解剖行為を定義した。「解剖」「解剖術」で人体を観察する方法・技術を、「外科解剖学」で解剖学の臨床運用の意を表した。これは近代的な解剖学の概念に完全に一致する。<sup>26)</sup>

しかし、書名には依然として「全体」を付けるのは「全体(学)」の影響力が強いからであろう。専門の医学者はもちろん、孫詒讓のような儒学者も「全体学」としての解剖学に積極的に対応した。『周礼政要・考医』の中で、作者は西洋医学を紹介した際に、解剖学のことに言及している。

惟泰西……其工醫者必通全體學而知五藏九竅之功用與其形性……間或不驗，則解剖肢體，以審其病之所在，而著其不癒之狀於冊。<sup>27)</sup>

興味深い点は解剖学を「全体学」と、解剖行為を「解剖(肢体)」と称することである。

この時期、確かに様々な術語が併用されていると考えられる。しかし、多くの解剖学の著作があるため、逐一調査するのは不可能である。幸いなことは20世紀に入り、術語統一に努める機構や学者が現れてきた。1901年博医会は(China Medical Missionary Association)『第一份医学名詞委员会報告』を作り、解剖学関係の術語について下記のように規定している。

Anatomy,	體學
◊ comparative,	較
◊ descriptive,	解
◊ general,	體學
◊ histological (see Histology).	?
◊ human,	人
◊ morbid,	症
◊ regional,	分處     <sup>28)</sup>

24) 合信(1851)「序」、合信著、陳修堂同撰(1857)『全體新論』、江戸、大阪、京都：須原屋茂兵衛 他、葉1b-2a。

25) 合信『全體新論・圖』。

26) 高晞“‘解剖学’中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，89-93页。

27) 孫詒讓(1902)《周禮政要》(卷下)，瑞安：普通學堂，葉45ab。

28) China Medical Missionary Association Terms ed. (1901). *First Report of the Committee on Medical Terminology: Anatomy, Histology, Physiology, Pharmacology, Pharmacy*, Shanghai: The Presbyterian Mission Press, p.1.

博医会の学者たちは、科学名を「体学」と定め、それを軸として、「較体学」「解体学」「人体学」などの術語を訳出している。前文で論及したホイットニーも当時の名詞を改定しようとした。既に挙げた「Anatomy (morphological), [新名] 體學, [舊名] 闡微」のほかに、別に「general Anatomy, [新名] 體學, [舊名] 總體學」という項目がある。<sup>29)</sup> ここで、「体学」という術語が選ばれただけではなく、「闡微」「総体学」などが使われていたことが分かる。

1927年、教育部審定、科学名詞審査会編印した『解剖学名詞彙編』の中で、終に「解剖学」の地位が正式に確立された。<sup>30)</sup> ただし、この十年前、医学名詞審査会第一次会議の審議の中で、「解剖学」が既に公的な用語として定められている。もちろん、「解剖」も解剖行為の術語となる。<sup>31)</sup> このように、中国で最初に「解剖」「解剖学」を使用した『全体通考』を重視しなければならない。

### 2.3 華英・英華辞書にみる解剖学用語

『全体通考』は、もちろん、重要な文献で、詳しく考察する必要があるが、その成立はそれほど早くない。周知の通り、いわゆる「西学東漸」をより早く再興したのはイギリスのプロテスタントの宣教師モリソン（Robert Morrison、馬礼遜1782-1834）である。彼の来華により、辞書などが編集されてようやく、大量の中西の学者は語学の難関を克服し、専門的な知識を伝播・受容できるようになった。従って、この節では、モリソンをはじめとする西洋人の宣教師ないし中国人の有識者による華英・英華辞典から、解剖学の訳語を考察したい。

辞典の項目は細かく、それぞれを論説するのはわかりにくくなる可能性が高い。幸い、近年、台湾中央研究院近代史研究所によって、『英華字典資料庫』というデータベースが初歩的に整備された。<sup>32)</sup> このデータベースには、1815年から1919年までの間で代表的な華英・英華辞典の全文テキスト（11部・3部）と影像（24部）収録されているので、快速かつ正確に語彙を検索できる。そこで、『英華字典資料庫』の全文テキストと影像を利用し、下記の解剖学関係の術語の対照表を作成した。

29) Whitney. *A Glossary of English and Chinese Anatomical Terms*, p.1.

30) 高晞 “‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，82頁。

31) 醫學名詞審査會（1917）“醫學名詞審査會第一次開會紀錄”《中華醫學雜誌》第三卷第二期，30-32頁。

32) アクセス <http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>（ただし、検索結果を完全に表示するには登録が必要。）

表2 華英・英華辞書にみる解剖学用語の対照表<sup>33)</sup>

年代	作品名 (作者の西洋名)	DISSECT	DISSECTION	ANATOMIZE	ANATOMY	その他
1822	馬禮遜華英字典 (Robert Morrison)				ANATOMY	anatomical plate 1 仰人骨度部位図、2 正面人図
1844	衛三畏英華韻府歷階 (Samuel Wells Williams)	碎割			骨節臟腑	
1847-48	麥都思英華字典 (Walter Henry Medhurst)	1 剖開、割破、剔、剔 2 剖身 3 切割、割開	剖身之法	破身察微、剔骨	剖屍之法、外科破肢之方	
1866-69	羅存德英華字典 (Wilhelm Lobscheid)	1 剖、剖開、割、剖開、割破、切開、剔、剔開、剖解 2 剖身、剖身、剖人、剖屍…	1 剖者、切開者、切解者 2 剖身者	1 剖屍、剖查百體 2 剖開細查 3 剖屍察微	1 剖屍之法 2 百體生之理 3 百體生論	an anatomical plate 人形圖 anatomist 1 剖屍者 2 剖屍妙手、精於剖屍 3 深識剖屍之理者 dissector 剖者、拆開者、切開者
1872	盧公明英華萃林韻府 (Justus Doolittle)	剖開、碎割、剖開、剖破、剖身	剖身之法		骨節臟腑、剖屍之法、外科破肢之方	anatomical plate 人形圖
1899	鄺其照華英字典集成	剖開、割碎、剖	剖身、切開	剖屍細驗、剔骨	剖屍之法	anatomist 剖屍者
1908	顏惠慶英華大辭典	切碎、解剖、剖身、剖屍；…	切碎、分解、解剖、剖身…	剖屍、剖查百體、剖開細查、剖屍察微	1 屍骨、骸骨、解剖之物 2 剖解有機體各物之學 3 百體生論、解剖課本 4 百體結構之理 5 剖屍之法、外科破肢之方、解剖術	anatomist 剖屍者、剖屍妙手、精於剖屍者、深識解剖之理者 anatomization 解剖之事 anatomizer 解剖者 dissector 剖者、切開者、解剖家
1911	衛禮賢德英華文科學字典 (Richard Wilhelm)	Sezieren 解剖	Sektion 解剖		Anatomie 體學、解剖學	Botanik, anatomische 植物解剖學 Pflanzenanatomie 植物組織學、植物解剖學 Tieranatomie 獸體解剖學 Vivisektion 活體解剖
1913	商務書館英華新字典	剖開、切開	解剖、分切、分為細分	剖屍、剖屍察微、剖查百體	剖屍之法、解剖之學、驗骨節臟腑之術	anatomist 解剖學家
1916	赫美玲官話 (Karl Ernst Georg Hemeling)	解剖 (部定)、解剖	← same as dissect		1 解剖學 (部定) 2 體學 (新) …	anatomist 1 體學士 (新) 2 解剖士 (新) dissector 剖者、解剖者

33) 主に動詞「DISSECT」「ANATOMIZE」、名詞「DISSECTION」「ANATOMY」など、四つの項目を検索し、さらに関連動詞、名詞を補充してからなる。ただし、日本方面の『1884井上哲次郎増訂英華字典』を排除。対応項目がない場合、空白にする。再検証の便利のために、『英華字典資料庫』の表記法に従うこと。品詞の表記、英語の解説、注音、及び主題外の内容などを略す。

上表に示したように、1822-1916年の間に出版された11種の華英・英華辞書で関連項目を得ることができた。より早く解剖学関係の用語を収録しているが、初めは語義の対訳ではなく、主に「anatomical plate 1 仰人骨度部位図、2 正面人図」という項目の中で、モリソンの採用した方法で解説・説明をしている。

解剖動作（動詞「DISSECT」「ANATOMIZE」）は「碎割」（1844）、「剖開」「剖身」「破身察微」（1847-48）などの用語から「解剖」（1908、1911、1916）へ発展していく。一方、解剖行為（名詞「dissection」）も「剖身之法」（1847-48）や「剖者」「剖身者」（1866-69）から「解剖」（1908、1911、1916）へ発展したと言える。また、学科名は「ANATOMY」は「骨節臟腑」（1844）、「剖屍之法」「外科破肢之方」（1847-48）、「百体生之理」「百体生論」（1866-69）から「体学」「解剖学」（1911、1916）へ変化した傾向が見られる。

前二節の訳語と論説を対照してみれば、この時期に至っても、西洋の解剖学を主に「人身説」「臟腑之事」「（全）体学」を以て、人体の構造と理解しながら、思弁・探索を推し進める。しかし、解剖実践の展開はかなり遅くなり、清末民初のころ初めて広がったそうである。

「解剖」という訳例を探ると、1908年顔惠慶の『英華大辞典』に初めて見られる。「解剖術」「解剖家」「解剖之事」「解剖者」などの訳例が存在しているから、「解剖」はより多く使用されている。顔氏は明確に日本の英和辞書などを参考すると言っているが、「解剖」も日本語からのものであると言いがたい。<sup>34)</sup> 何故なら、前節で論じたように、1886年、専門的な解剖学の作品『全体通考』では、既に「解剖」「解剖学」などの術語が登場しているからである。また、「解剖学」の出現は1911年以降のことであり、それほど早くない。

では「解剖」「解剖学」の訳出は『全体通考』に由来するのであろうか。この資料を考察するまえに、1543年以降、本土で西洋人との直接的交流を維持した日本側において、西洋解剖学の受容また術語の翻訳、殊に「解剖」「解剖学」の対応する訳語はどうであるか検討する必要があると思われる。

### 三、日本側：実践を基礎とする学問の深化

18世紀半ば以降、「解剖学」という概念に関する日本側における翻訳・用例などについては、高氏による整理・探索があり、ほぼ「解体」から「解剖」へ変化したことが示されている。その変化の時期は大體明治初期であり、その原因は西洋文明の受容した方法・ルートの変化と医学教育制度の改革であるとまとめている。<sup>35)</sup> ただし、日本では、解剖学の受容はより早く展開されているのみならず、「解剖学」の登場もより早く、その変化の原因もさらに複雑であるため、ここで再検討し、より詳しい情報を加えると同時に、より明白に「解剖」「解剖学」の訳出及びその定着を示したい。

通時的な歴史の脈絡を整理すれば、日本人学者は西洋医学の影響を受け、死体解剖を実践しながら『黄帝内経』をはじめ、中国の古典漢学書籍から「解剖」という語彙及び関連した理論知識・解剖事件を発見する。さらに蘭書翻訳と解剖実験を通じ解剖学の受容・消化を深化させる。『解体新書』からの強い影

34) 顔惠慶（1908）“Preface”（the editors）& “訳例八則”，顔惠慶 他編《英華大辞典》，上海：商務印書館，ii-iii頁，第八則（頁数無し）。

35) 高晞 “‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，93-99頁。

響を受けて「解体」という術語が広く知られ、長く継承されるが、次第にその問題も表出し、従来使用されてきた「解剖」に取って変わる。その過程に「解剖学」という訳語も出来、漢学の権威などの要素によって、より多くの学者に受け入れられた。分かりやすいように、まず、以下の一覧表を作り、全体像を提示したい。

表3 江戸以降における「解剖」「解剖学」の関係術語の文献及びその用例の一覧<sup>36)</sup>

年代	文献名	「解剖」	「解剖学」	その他
1682	阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解	割離、割開・	経絡筋脈臟腑	和蘭全軀内外分合図 (1772年刊)
1754	和蘭文訳六集	トク		人ノ臟腑ヲトク
1759	蔵志	解	骨節剝之書	『漢書・王莽伝』の「剝剥」を引用
1772	解屍編	解、剖・		『黄帝内経』の「解剖」を引用
1774	解体新書	解体、解剖・	解体、解体瘍科	『黄帝内経』の「解剖」を引用
1796	波留麻和解	剖解、解剖・	解剖ノ術	
1811-45	厚生新編	解剖・	解剖科・	
1815	眼科新書		解剖科	
1826	重訂解体新書	解剖	解體科	
1832	医原枢要	解剖		人身解剖窮理ノ書
1833	道訳法児馬	解軀シタル、解軀スル	解軀術	
1838	缺舌或問	解剖、解体		解剖所、解剖学院
1830s	鑄人書	人身諸部ヲ分解離析シテ	解剖学、解剖ノ学	
1840s	中西雑字簿、博物語彙		解剖学	
1857	扶氏経験遺訓	解剖		解剖学家
1862	英和对訳袖珍辞書	解剖、解体	解剖学、骨組 (ミ)	
1872	医語類聚	解剖	解剖学	人身解剖、活兽解剖、解剖论
1872	解剖訓蒙	解剖	解剖学	解剖学教頭
1874	解剖必携	解剖	解剖学	解剖実験、解剖書、解剖術、解剖局
1883	解剖大全	解剖	解剖学	生理解剖学、人軀解剖学、局處解剖学、比較解剖学

表に示したように、大体、『解体新書』以前、『解体新書』とその影響、「解剖学」の形成及びその流布、三つの段階からなっている。以下、それぞれ論考する。

### 3.1 『解体新書』以前における「解剖」の発見

一般的に、蘭書が初めて訳出されるのは『解体新書』(1774)に遡及するが、西洋の解剖学の受容はさらに早くに遡ることができる。『解体新書』以前では、大体以下の四作品に注目すべきである。

今日、蘭書の翻訳は長崎のオランダ通詞本木庄太夫(1628-97)に遡及する。1682年頃、庄太夫は、ドイツ人の学者レメリン(Johannes Remmelin, 1583-1632)の『小宇宙鑑』(*Catoptrum microcosmicum*, 1613)のオランダ語訳(*Pinax microcosmographicus*, 1667)に基づき、初めて『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』という解剖書を編訳する。この出版は百年ほどの後のこととなるが(1772年で『和蘭全軀内外分合図』というタイトルで刊行)、その前に写本として流布している。逐語訳ではないので、あえて具体的な

36) ここではオランダなどの原語を示さず、後文の具体的な考察の中で論じる。

訳語の対応の推定は不用である、ただし日本語訳の用語をみると、解剖行為と解剖学との言い方が分かる。写本の影印版からみれば、前者を「割離」や「割開」と言うが、後者を「経絡、筋脈、臟腑」などに関する知識、または「全軀内外分合」、つまり、人体構造の学問として理解しているだろう。<sup>37)</sup>

次は、八代将軍徳川吉宗（1684-1751、1716-45在位）の命令を受けて、オランダ語を勉強した学者青木昆陽（1698-1769）である。氏も解剖学関係の語彙に接触した。宝暦四年（1754）、昆陽は江戸へ来る蘭人を訪れ、『和蘭文訳六集』を編集した。その中に、

Jngewand インゲワント 臟腑（J之部）

ontbinding ヲントビインディキ 人ノ臟腑ヲトク（O之部）<sup>38)</sup>

とあり、オランダ術語を関連の語彙と対応させるか、あるいは、解説する。

それから、山脇東洋（1706-62）の『臧志』（1759）と河口信任（1736-1811）の『解屍編』（1772）がある。両方とも解剖実践に基づいた観測記録であるが、西洋の解剖学とつながっている。前者には「嚮者獲蠻人所作骨節剮割之書。當時憤々不辨。今視之、胸脊諸臧。皆如其所圖。履實者。萬里同符。敢不嘆服」という論説がある。<sup>39)</sup> いわば蛮人による骨節剮割の書、西洋の解剖作品であるということだろう。原文を読めなく、所論もはっきり分からないが、死体を解剖し、人体の内臓はその図録と符合しているということを見出した。後者の作者が、「余先祖父受術於紅夷、先父紹之（中略）余囊遊長崎、事栗崎道意」と論じたように、<sup>40)</sup> 医学の家計出身で、長崎へ遊学し、西洋医学を学ぶ。その解剖観察も「隨解隨辨、遂置之卓上而並觀、考諸華說則背、照諸夷圖則近、始信夷圖真、而華說未盡」という方法、即ち、中西医学の論説を対照した上で行われている。解剖実践を通じ、西洋の解剖学への認可または中医への疑問を深めている。しかしながら、漢学資源の利用も確かなことである。前者の序文では、儒学者梁田蛻巖（1672-1757）は『漢書・王莽伝』の解剖事件を利用し、後者では『黄帝内経』の「解剖而視之」を引用している。当時の日本においては、西洋文化の影響が小さく、漢学の権威の下で、片言隻語であっても、関連する中国のものを利用することで自分たちの解剖実践の正当性を論弁する、ということが伺える。

一言いえば、西洋医学と接触してから、その解剖学の刺激を強く受け、解剖行為について、「切開」「トク（解く）」「解剖」「解屍」などの言い方が利用されている。一方、解剖学は、大体、医学に属した内臓など人体構造の知識として理解されている。漢学典籍から「解剖」という用語及び関連事件が掘り出されたのである。

37) 原三信編（1995）『日本で初めて翻訳した解剖書』、福岡：六代原三信蘭方医三百年記念奨学会。用語は図録と六代原三信の写本により整理。

38) 青木昆陽（1754）『和蘭文訳』、沼田次郎、松村明、佐藤昌介校注（1976）『洋学』（上）（日本思想大系64）、東京：岩波書店、25、28頁。

39) 山脇東洋（1759）『臧志』（乾之卷）、平安：養寿院、葉5a。

40) 河口信任（1771）『解屍編序』、『解屍編』（写本、Google Books）。以下同じ。

### 3.2 『解体新書』による「解体」及びその影響

1774年、『解体新書』という漢訳蘭書が世に問われた。この作品の内容及びその深遠な意義は、既に周知のことであるから、贅言を要しない。

凡例の中で、訳者の一人杉田玄白（1733-1817）はタイトルについて、「亞那都米譯解體也。打系縷譜也故今日解體新書」と説明する。<sup>41)</sup> 原書のラテン語名「Tabulae Antomicae」とそのオランダ語の訳名「Ontleedkundige Tafelen」とを総合してみれば、玄白の言い方は「打系縷 (tafel)」（図譜）と「antomica/anatomia」（解剖学）とを混交したものであろう。<sup>42)</sup> ただし、発音からみれば、「亜那都米」はラテン語にちなんだ蘭語「anatomie」であるかもしれない。いずれにせよ、解剖学を「解体」で理解することは疑いを差し挟む余地がない。また、訳者は「解体瘍科」とも称する。<sup>43)</sup> 瘍科とは、腫れ物を治療し、一般的に手術が必要となる外科に属する部門である。最初に西洋医学を受容した際、主にそれは外科であるから、瘍科と称する。即ち、解剖学を一種の外科として認識していると考えられる。

字面が示すように、「解体」は身体を解くという意味で、知識や学問の名称のみならず、解剖行為とも言える。その他、漢語「解剖」、<sup>44)</sup> 和語「腑分け」<sup>45)</sup> などの言い方がある。解剖行為の合理性を論じるために、『黄帝内経』の「解剖」も援引しているの、<sup>46)</sup> 「解剖」も一種の言い方であろう。

その後、玄白の弟子大槻玄沢（1757-1827）は、『重訂解体新書』（1826）の中で術語の修訂を行っている。

解體科 新定義譯 空納多密亞 羅甸 翁多羅鐸工牒 和蘭 按翁多羅鐸者解剖肢體之義。工牒者。術也。科也。即謂支分節解全軀。熟觀內象之科之義也。<sup>47)</sup>

「解体科」をラテン語「空納多密亞 (anatomia)」、オランダ語「翁多羅鐸工牒 (ontleedkunde)」と対応させている。「ontleedkunde」は、肢体を解剖する「ontleed」と、「術」や「科」を含む「kunde」とからなっているから、玄白の「解体」を土台とした上で意識（義訳）して「解体科」と確定している。注意すべき点は解剖行為について、先師のように、多くの言い方があるのではなく、「解剖」を使っている。

しかし、『解体新書』による「解体」が広く用いられており、江戸における玄白の弟子たちに限らず、より早くオランダ語や西洋医学に接触した長崎方面もこの用語を使うようになった。オランダ商館長ゾーフ (Hendrik Doeff, 道富 1777-1835) と蘭通詞らとの協力によって編纂された『道訳法見馬』（1833）には、以下の記述が見られる。

41) 杉田玄白（1774）「凡例」、『解體新書』（序圖卷）、東武：須原屋市兵衛、葉 3a。

42) 杉本つとむ（1987）『解体新書の時代』、東京：早稲田大学出版社、229-31頁；岩崎克己（1996）『前野蘭化2：解体新書の研究』、東京：平凡社、17-21頁。

43) 杉田玄白「凡例」、葉 2b。

44) 同上、葉 2a。

45) 杉田玄白（1869）『蘭学事始』（巻上）、東京：天真樓、葉 23a。

46) 杉田玄白「凡例」、葉 2a。

47) 大槻玄沢（1826）『重訂解體新書』（巻五）、京都、大阪、江都：植村藤右衛門 他、葉 2a。

ontleed. d.w. 解躰シタル  
van ontleeden  
ontleeden. w. w. 解躰スル  
ann stukken inijden ontleeden.  
un lichaam ontleeden. 人ノ躰ヲ解躰スル  
ontleeder. z. m. 解躰スル人  
die Heelmeester is een kunstig ontleeder 其医者ハ解躰ニクワル  
ontleeding. z. v. 人躰ヲ解躰スル事  
ontleed konst. z. n. 解躰術<sup>48)</sup>

上記の解剖学の関連用語は玄白による「解体」に基づき、訳語あるいは解説を与えている。解剖行為を「解体」、解剖学を「解体術」と翻訳する。「解体術」も「解体科」も玄沢の論じるように「kunde」「konst」との訳語であるから、問題ではない。しかし、問題は「人（ノ）体を解体する」のような使い方である。「体」という漢字の重複が大きな問題ではあるかもしれないが、目的がある複合動詞が目的語を支配するのはおかしい。

上述のように、『解体新書』以降、「解体」という術語の影響は広く強い。明治時代に至っても、辞書の編纂者は多く「解体」「解体学」を解剖学の名称として用例を収録している。<sup>49)</sup> それは辞書の語彙更新の立ち遅れや全面性を考慮したとしても、ある程度で「解体」の深遠な影響力を証明できる。簡単にいえば、その時期、「解体」は解剖学としての名称とともに、解剖行為を指すのである。「解体」を基礎にし、「解剖科」「解剖術」などの訳語が生まれ、解剖学の名称として使われている。ただし、解剖行為の言い方に関して、「解体」の他に、「解剖」などの術語が存在している。よって、術語が乱立するのは不可避の事実であろう。

### 3.3 「解体」から「解剖」への転向

前の二節に論じたように、「解体」の影響は強いが、ほかの言い方もないわけでない。その中でも、「解剖」という用例に特に注目すべきである。発見者河口信任だけでなく、「解体」の唱導者杉田玄白およびその継承者大槻玄沢も「解剖」を利用している。事実は、玄白、玄沢の門下生も「解剖」を多用していたそうである。この上に、関連した訳語が作り出され、遂に「解剖学」という新術語が創出された。

#### 3.3.1 「解剖」の上昇

「解剖」の多用は玄沢の弟子稲村三伯（1758-1811）から始まったようである。三伯は長崎より早く日蘭辞書の編纂を完成した。同一の底本を利用したが、三伯は異なる訳語を制定した。

48) ヘンドリック・ゾーフ編著（1833）『道訳法児馬』（第5巻）、松村明監修（1998）『近世蘭語資料第III期 道訳法児馬』、東京：ゆまに書房、306-08頁。

49) 惣郷正明、飛田良文編（1986）『明治のことば辞典』、東京：東京堂出版、58-59頁。

ontleed. v.z. 剖解スル  
 ontleeden. w.w 同上  
 ontleeder. z.m. 剖解スル人  
 ontleeding. z.m. 解剖スル  
 ontleedkonst. z.m. 解剖ノ術<sup>50)</sup>

興味深い点は、三伯は玄沢の弟子であるが「解体」を使わず、「解剖」「解剖」を土台にし、玄沢や長崎方面と異なる訳語を作り出した。解剖行為は「剖解」「解剖」と称するが、解剖学は「解剖の術」にしている。「剖解」「解剖」は「解体」の競争者あるいは並立者として存在している。解剖学「ontleedkonst」を術として理解するのは長崎のやり方と同じである。

その後、玄白の次子である杉田立卿（1786-1846）も「解剖」を選び、さらに「術」を「科」に変える。立卿は『眼科新書』（1815）という作品の中で、

蓋和蘭醫流。其論定症候治術也。一從内景而來。故苟志于醫者。必以學解剖科為宗源。此為識其常以應其變也。<sup>51)</sup>

と論じる。上記の辞書の編纂者たちは解剖学を同じのように一種の術として認識するが、立卿は玄沢の如き、一科の学問として理解していると言える。

初めて生理学を日本へ紹介した『医学枢要』（1832）において、訳者高野長英（1804-50）は解剖作品を「人身解剖窮理ノ書」（巻一「題言」、1a）として受け入れ、また「死後屍ヲ解剖シテ見ルニ」（巻一「人身総括第四」）と論じ、解剖学も解剖行為も「解剖」という用語で議論する。<sup>52)</sup>

いつの間にか、「解体」は使用されているが、「解剖」の用例が多くなっている。例えば、渡邊崋山（1793-1841）は『駄舌或問』の中で両者を併用しているが、「解剖」をより多用している。

或問、医学の致方は如何様に致し候や。

答曰、(中略) まづ解剖所に三年間従事致させ候。それも医学を心がけ候童子は、在宅の間に解剖の図書を熟読いたし候も有之候て (中略)

或問、解体は死罪のものを用ひ候や。

答曰、盜賊をも用ひ申候。解剖学院にて月六ヶ日解体するや。(中略)

或問、その始めて従事する解剖は、いかやう手数かゝり候事に候や。<sup>53)</sup>

50) 稲村三伯（1906）「波留麻和解」（第5巻）、松村明監修（1997）『近世蘭語資料第I期 波留麻和解』、東京：ゆまに書房、108頁。

51) 杉田立卿（1815）「凡例」『西説眼科新書』、京都、江戸、大阪：河内屋藤四郎 他、葉2b-3a。

52) 高野長英全集刊行會編（1930）『高野長英全集第一巻』、岩手：高野長英全集刊行會、5、36頁。

53) 佐藤昌介、植手通有、山口宗之校注（1971）『渡邊崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』（日本思想大系55）、東京：岩波書店、89-91頁。

この問答には、既に「解体」と「解剖」との区別が見えず併用されているが、「解剖所」「解剖学院」などの言い方が記されている。「解剖」から新しい言い方が確かめられる。

1811-45年の間、江戸幕府の翻訳事業として作成された『厚生新編』の中で「解剖」の用例はより多くなる。

1. 志ある人は他の精詳の刺絡書并に解剖書を併せ考るにあるへし（1937: 36、1978 I: 84）
2. 夫和蘭醫法は先預人身天賦内外具有の諸物を熟視して實驗審定するを基本とす。これ解剖科を醫法の宗源とする所以なり。（中略）宜しく解體譯説を讀て識すへし。（1937: 37、1978 I: 87）
3. 按に此物和蘭内景の學に入らざるものは辨へかたし。解剖諸説と参考すし。（中略）宜しく解剖諸書と参考すべし。（1937: 95、1978 I: 296）
4. （按）彼治療書にこれを解剖したる圖を見るに（1937: 286、1978 II: 133）
5. 此獸解剖して見たりしに（1937: 385、1978 II: 485）
6. 但し此生子の事は魚類の解剖の説に附録して可なり。（1937: 482-83、1978 III: 28）
7. 右の法は宮殿樓閣諸器械解剖〔「部」より改訂〕圖等の圖繪には宜からず。（1937: 523、1978 III: 203）
8. 此蝦蟆を解剖〔「部」より改訂〕したる室二ヶ月のあひだ臭氣散せずといふ。（1937: 560、1978 III: 354-55）
9. 外科・産科・解剖科の研究説を考ふる（1937: 602、1978 III: 525）
10. 名醫此獸解剖せり（1937: 686、1978 IV: 7）
11. ネイル川産の鰐を解剖説あり（1937: 715、1978 IV: 128）
12. 然れども足を解剖すれば見るべし（1937: 743、1978 IV: 243）
13. 解體科にて髓の用を説くに（1937: 775、1978 IV: 379）
14. 半身不遂にて死したる屍を解剖してこれを證し（1937: 806、1978 IV: 514）<sup>54)</sup>

十数人の訳者がいるので、用語が異なるのは当然であろう。上記の14箇所（16回）の用例から見れば、例5「解剖」という特例のほかに、「解体」と「解剖」（例7、8の改訂については次の節で論じる）しか使用されていない。解剖行為は基本的に「解剖」（例4、8、10、12、14）が使われている。一方、解剖学は「解剖科」（例2、9）と「解体科」（例13）と二種の言い方がある。しかし、関連の用法は「解剖（諸）書」（例1、2、3）、「解剖（諸・の）説」（例3、6、11）、解剖図（例7）など、七つの用例があるが、「解体訳説」（例2）は一つしかない。術語はまだ統一されていないが、「解剖」の用例が増えているのは明確な事実である。

54) この作品は部分の活字版（1937）と対応の影印版（1978）の二種類があるため両者を参照した。貞松修藏編（1937）『厚生新編』、静岡：厚生新編刊行會；ショメール著、大槻玄沢 他訳（1978）『厚生新編』（静岡県立中央図書館蔵）（I-IV）、東京：恒和出版。

### 3.3.2 「解剖学」の形成と普及

前述の考察からみれば、解剖行為は大体「解剖」と称するようになったが、解剖学は「解体」「解体術・科」「解剖術・科」などの言い方がある。しかし、「解剖学」という術語がいつ訳出されたか不明である。前節では、渡邊崋山の「解剖学院」という用例があり、「解剖学」という漢字の組み合わせがあるが、学科名とは言い難い。

具体的な年代を判断することは難しいが、「解剖学」という近代的な学科の新概念は『厚生新編』の訳者の団体の中で、1830、40年代に形成したと確認できる。

1830年代の末、訳者の一人である小関三英（1787-1839）は、西洋の教育体制を紹介した作品『鑄人書』の中で<sup>55)</sup> 以下のように論じる。

観察医学ハタ、二人身病ヲ発スルノ理ト薬剤ノ性トヲ講穹スルナリ是ニ属スルハ解剖学。分析学。本草学。ナリ [イ] 解剖学ハ人身諸部ヲ分解離析シテ其天然。集合。力勢ヲ知ルナリ<sup>56)</sup>

いわゆる「観察医学」、人身の病理や薬効を探求する学問であり、「解剖学」「分析学」「本草学」など、三つの分枝からなっている。その「解剖学」は人身の各部を分解して、その本質、構造、働きの原理などを探求するものである。ここの「解剖学」は、即ち解剖学のことであろう。「解剖学」の言い方は、范氏の論じた「解剖」が「解剖」に誤読された、という説が思い出される。

しかし、同一の章節には確かに「解剖」の用例がある。

余カ所謂内科医ハ観察ト実治トノ医学ニ研精シテ之カタメニ若干ノ年月ヲ費シ大孛校ニ勤孝シ瘍科并ニ解剖ノ学ヲ親ラ勤メ内外諸術ヲ二肩博渉スルナリ。(中略) 瘍医モ亦当ニ解剖術ニ精通シ<sup>57)</sup>

引用文によると、内科であれ、外科（瘍医）であれ、学習者は解剖のことを学ぶべきとある。字体の異同を問わず、「解剖術」「解剖ノ学」の用例は確かである。同じ訳者、同じ作品、同じ章節に出てくるものであるから、「解剖」と「解剖」と、異なる二種の使い方を併用するのは不思議である。字形からみれば、謄写の誤記の可能性が高いが、後者が前者の誤写であると判断するのが無理だろう。しかも、前文に論じた学者の訳例を対照してみると、「解剖」の用例しかなく、「解剖ノ学」という訳例は初めて出てきたのである。

もう一人の『厚生新編』の訳者、後期蘭学の主幹である宇田川榕庵はその著作において、より明確に

55) 『鑄人書』の成立は未詳であるが、渡邊崋山1839年三四月頃、書き下ろした著述『外国事情書』にもこの影響が見られる。また三英が同年の五月自殺して死去したので、ここで粗末に1830年代の末にする。岩田高明（1997）「小関三英訳『鑄人書』の西洋教育情報：江戸時代における西洋教育情報受容の特質」、『教育史学会紀要』第40集（『日本の教育史学』）、22-38頁。

56) 小関三英「鑄人書」、葉17b。天理図書館善本叢書と書之部編集委員会（1986）『洋學者稿本集』（天理図書館善本叢書と書之部第八十巻）、天理：天理大學出版部、414頁。

57) 同上、葉20b-21a、『洋學者稿本集』、420-21頁。

「解剖学」という訳語を使用する。榕庵のノート『中西雑字簿』には「anatomica 解剖学」という項目があるだけでなく、その表題紙にも「解剖」という用語が記されている。<sup>58)</sup> そのほかに、榕庵の別のノート『博物語彙』の中にも「anatomica 解剖学」との項目が見られる。<sup>59)</sup>

この二冊のノートについては、成立年代が不明なので、「解剖学」という訳語の形成時期も分からない。榕庵は1846年に没しているため、1840年代と認定するのは粗末であるが、今の段階では無難なやり方と言えるだろう。榕庵のノートにみる「anatomica」は古典ギリシャ語「*anātōmīcē* (ἀνατομική)」に因んだラテン語で、単数の主格である。何故、蘭学者の筆にはラテン語が含まれているか、興味深い問題である。ラテン語の存在及びその地位について、『解体新書』の時代の蘭学者は既に認識を持っている。訳文には、関連のラテン語の音訳術語があるだけでなく、この言語についての説明が見える。

然弗卵察。諳厄利亞。伊斯把佻亞之三州。有互相通者呼云羅甸。猶吾邦漢朝鮮等。各雖異言語其文一也。蓋和蘭為州也。凡有物必有羅甸與國語。今所直譯悉用和蘭國語也。間有羅甸而無國語者。如此之類。用羅甸譯焉。<sup>60)</sup>

フランス、イギリス、スペインなどの国は互いに異なる言語を使っているが、ラテン語で交流できる。それは日本、朝鮮などの東アジアの諸国が漢文を持っているのと同様である。オランダにおいて、事物の名称は一般にラテン語とオランダ語がある。訳文にみる音訳（直訳）語はほとんどオランダ語に翻訳されるが、時にはラテン語から翻訳されている。学術用語の視点から見れば、玄白の論説は大体正確であろう。

従って、榕庵の筆に見られるラテン語の項目は偶然の現象ではない。しかも、榕庵は確かにこの言語を学んだ経験を持っている。上記の二冊のノートの他に、榕庵によって撰集されたラテン語彙帳、化学、薬学、医学など、約700の語彙を収録した一冊が見られる。<sup>61)</sup>

三英、榕庵両者の三冊の資料を総合的に見れば、「解剖学」という訳名は遅くとも1830、40年代ごろ既に形成したと言えよう。ただし、これらの文献はいずれも出版物ではなく、写本としてある程度閲覧されていた。公開的な発行物の記事として、いつごろ、世に問われたのか、考えるべきであろう。

管見の限り、緒方洪庵（1810-63）の訳述『扶氏経験遺訓』（1857）には「解剖学」という組み合わせが見られる。しかし、この作品には「解剖」の用例が多いが、<sup>62)</sup>「解剖学」は一回しか出てこないが、「家」と共に使用され「解剖学家」という用例として使われている。<sup>63)</sup> だが、1862年に上梓された『英和对訳袖

58) 宇田川榕庵『中西雑字簿』（写本、早稲田大学図書館所蔵）、3頁及び表紙。

59) 宇田川榕庵『博物語彙』（写本、早稲田大学図書館所蔵）、2頁。

60) 杉田玄白（1774）「形體名目篇第二」、『解体新書』（巻一）、江戸：須原屋市兵衛、葉4b-5a。

61) 宇田川榕庵（1823）『羅甸語解』（写本、早稲田大学図書館所蔵）。宮永孝（2004）『日本洋学史：葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』、東京：三修社、69-75頁。

62) 適塾記念会緒方洪庵全集編輯委員会（2010）『緒方洪庵全集』、大阪：大阪大学出版会、第一巻、69、255、269頁；第二巻、53、134、205頁。

63) 同上、第二巻、53頁。

珍辞書』には既に系統的に関連の語彙を載録している。「Anatomy, s. 解剖学. 骨組 (ミ)」のほかにも、「Anatomical, adj. 解剖学ノ」「Anatomically, adv. 解剖学ニテ」「Anatomist, s. 解剖学スル人」「Anatomized-ing, v. a. 解剖学スル」などの訳例もある。<sup>64)</sup> また、同書には

Analysis, s. 解剖. 分離  
Analytical, adj. 解剖. 分離  
Analyze-ed-ing, v. a. 解剖. 分離

Dissect-ed-ing, v. a. 切. 解体  
Dissector, s. 事解剖之人  
Dissection, s. 解体之事<sup>65)</sup>

とあり、「解剖」は専門用語だけでなく、分析の類義語として使われているが、解剖行為は「解体」と称されている。

しかし、同じく1872年に公刊された『医語類聚』『解剖訓蒙』には、頻繁に「解剖」「解剖学」の用例が表れている。前者には、

Antomy 解剖学  
Andranatomia, 人身解剖  
Desmotomy, 全解剖論  
Dissection, 解剖  
Vivisection, 活獣解剖<sup>66)</sup>

とある。一方、後者には、

解剖学ノ教頭 (「題言」、1a)  
此書ハ解剖学ヲ脩メル者ノ門戸ニシテ (「序」、3a)  
解剖学教頭 (卷一「骨论」、1a)<sup>67)</sup>  
是以醫門之制必先脩解剖学真有旨哉 (「刻解剖図引」)<sup>68)</sup>

ともある。上記の用例からみれば、解剖行為は皆に「解剖」と言われるに対し、学科名は大体「解剖学」

64) 堀達之助編 (1862) 『英和对譯袖珍辞書』、江戸 [ : 洋書調所]、30頁。

65) 同上、30、225頁。

66) 奥山虎章 (1872) 『醫語類聚』、11、71、76、204頁。

67) 松村矩明譯 (1872) 『解剖訓蒙』、大坂 : 松村九兵衛。

68) 松村矩明譯 (1872) 『虞列伊氏解剖訓蒙圖』、大坂 : 浅井吉兵衛。

と統一されている。また、明治初期（1870年代）では、別に『布列私解剖図譜』（1872、本編及び図譜）、『解剖必携』（1874、6冊）、『解剖辞書』（1875）、『解剖生理浅説』（1875、3冊）、『解剖摘要』（1876、7冊並びに附図1冊）、『解剖便覧表』（1876、2冊）、『紙塑人体解剖譜』（1877）、『六門系統解剖図』（1878、2門）『人身生理解剖』（1877-78、4冊）、『医学七科問答：解剖学』『解剖符号』『解剖組織論』（1879）など、「解剖」を題名とする十数部の著述が公刊されている。<sup>69)</sup> そのうち、『解剖必携』の冒頭部分に限っても、「解剖実験」「解剖書」（「凡例」、1a）、「解剖術」（「凡例」、1b）、「解剖學」（「凡例」、3a）、「解剖」（「目録」）、「解剖局」（巻一、1a）などのような大量の用例が見られる。<sup>70)</sup>

この時期、ある程度において「解剖」「解剖学」が普及していたことが推測できるだろう。

### 3.3.3 「解体」「解部」を使用する可能性

日本において、学者はなぜ「解体」から「解剖」へ転向したのか。「解体」を維持する可能性はなかったのか。もし「解剖」が「解部」の誤写であれば、「解部」を使用する可能性はないのか。ここでは「解体」「解部」を使用する可能性について検討してみたい。

「解剖」と比較すると、「解体」の持っている意味や用法などの要素はその転向の要因となる。前述したように、「解剖」はより古い医学典籍『黄帝内経』から発見された用語であるが、「解体」は杉田玄白によって、初めて唱導された術語である。前者は中医経典に所載されたものであり、権威性を有するため、学者はただ出典を簡単に言明するのみで、深く論証しない。一方、後者の状況はより複雑である。玄白の唱導した「解体」は経典に見られるが、不幸なことにこの用語はほかの意味を持っている。大槻玄沢によると、当時の学者の間には、

世或有議此書題解。為誤字義者。偶觀其隨筆。舉左傳四方諸侯。誰不解體之語。謂不可取此譯名也。<sup>71)</sup>

という反論がある。なぜなら、『左伝・成公八年』には「大國制義、以爲盟主。……信不可知、義無所立、四方諸侯其誰不解體」（曰く、大國義を制して、以て盟主と爲る。……信知る可からず、義立つ所無くば、四方の諸侯其れ誰か解體せざらん）とあり、大國を盟主とする同盟は、信義の欠如によって、各地の諸侯がみんな離散し、崩壊されているという意味である。即ち、人身構造を論説した『解体新書』の訳名「解体」は本初の意味を誤っていると指摘された。

玄沢はまず『黄帝内経』『莊子・庖丁解牛』『孔子家語・問礼』の「體者肢體之體。即連結肢體也」（王肅注）、『国語・周語』の「半解其體。升之房也」（韋昭注）などの用例を援引し、それぞれに「解」「体」の意味を解説する。『黄帝内経』以外は、動物が受動者であり、人畜の区別があるが、その意味は同じで

69) これらの作品が既に「国立国会図書館デジタルコレクション」（アクセス <http://dl.ndl.go.jp/>）に公開されている。ここでは具体的な書誌情報を省略する。

70) 岡澤貞一郎（1874）『解剖必携』（巻一）、大阪：大野木市兵衛。

71) 大槻玄沢『重訂解體新書』（巻十二）、葉 2a。

ある、と弁じる。さらに明代の学者袁黄（1533-1606）が『歴史綱鑑補・秦王政二十年』（1610）の中で、秦の始皇帝が刺客荆軻の死体に引き裂き刑を施す事件を記録した句「遂體解荆軻以狗。注謂逐其節。解其肢體。以示衆也」を引用し、「解体」で人の屍体を解剖することをさすのは正しいと信じている（「是全解人之屍體也。而逐其節之言。妙盡解剖之狀。乃益信解體字妥當」）。<sup>72)</sup>

しかし、上記の論説は字義を誤った指摘に答えず、「体解」という問題をもたらした。

字義の指摘について、玄沢はまず「吾黨之取字。始不在於此也」という理由でその指摘に応じる。次に『貞観政要・君道』の「隋人解體」についての注釈「標註云。四支解折之意」を利用し、同じのような用例を因襲したが、古人が既に四肢を解き、分析するという意味で理解しているので、上記の『左伝』の用例を使っても、必ずしも非議されるべきではないと論じる（雖取之於此。亦未必可非也）。それから広く経籍にあたり、傍証博引し、「解体」の正確性を検証する。『周礼・夏官・羊殺』の鄭玄注「體解節折也」、『左伝』の杜予注「半解其體而薦之」、『国語』「體解節折而共飲食之」などの用例を蒐集し、肢体を分解するという使い方が古来よりあると論証する。上記の用例のうち「体解」であるため、特に「按即解體折節也。倒句法」として説明し、しかも『離騷』の「雖體解（朱註屠戮支解）吾猶未變兮」を引用して傍証している。<sup>73)</sup>最後に、玄沢は漢文の史書から何個かの用例を集め、「解体」の多用を示している。<sup>74)</sup>

総合的に言えば、玄沢は「解体」という訳語がふさわしく、変更など出来ないと主張している。<sup>75)</sup>しかし、上記の煩雑な論証は反対者の意見が道理として正しいということを反証するわけではないか、と考えられる。後世の注釈は『左伝』などの「解体」の意味を変えられないだけでなく、語順の異なる「体解」の例証は問題をより混乱させる。また、玄沢自身が察したかどうかかわからないが、頻りに「解剖」を使用しているのに、「解体」の正確性を論じるということは皮肉な矛盾であろう。

漢学の権威が急劇に衰頹する以前、出典を崇敬する時代には、強いて「解体」に新しい意味を増加することは不可能に近い。一方、『黄帝内经』という権威のある「解剖」が学者の間で、広く利用されているのは理解し難くないだろう。

また、複合語として、用語の成分構造も選択を制約すること。成分構造からみれば、「解体」は動詞と目的語からなっているが、「解剖」は動詞の並列である。単に解剖行為を指すのであれ、単独で使われたり、または「学」を加えて学科名になったとしても、両方とも同じ役割を果たすと考えられる。ある程度では、後者より、前者のほうが語義の完全性を持っている。しかし、後者自身は目的語が付かなく、より自由に使用できるのは確かなことである。前文で論じたように、『道訳法児馬』の「人（ノ）体を解体する」のような目的がある複合動詞が目的語を支配するのはおかしいと考えられる（3.2節）。

また、范氏のいわゆる正確な「解剖」も同じのような使用問題がある。范氏は隋代の楊上善『黄帝内经太素・十二水』の記録「死可解剖而視也」（死するや部を解して視るべきなり）及びその注「死則解其身部、見其府臟」（死すれば則ち其の身部を解し、其の腑臟を見る）を証拠として、今日の「解剖」はそ

72) 大槻玄澤『重訂解體新書』（卷十二）、葉 1a-2a。

73) 同上、葉 2ab。

74) 同上、葉 2b-3b。

75) 同上、葉 2ab。

の「解剖」の誤写であり、宋代以降、既に「李代桃僵」になってしまった。しかも、「解剖」の成分構造は同義の動詞を併用し重複するため、良い語とは言えないが、「李代桃僵」になってしまったので、やむをえず因襲して今日でも使用されつつある。<sup>76)</sup> 楊上善の単文孤証によって「解剖」の正しい用法を証明するのは不十分であるが、確かに一種の可能性を提供している。同義の動詞が併用され成分構造が重複することであるが、漢字語が単音節から二音節へ転化する過程においてよく利用される手段は同義字の並列であるため、「唱歌」「跳躍」「分配」「試験」などの用語が多くあり、単純に簡潔性を論じてはいけない。当時、「解剖」を使っても、使用の自由度の問題があるので、「解体」と同じく実用の可能性も高くないと考えられる。

もちろん、解剖学という用語の形成及びその定着において、「内景」や「人身内景」などの伝統的な中医の術語が仮称として使われている。<sup>77)</sup> それは多くの蘭学者が漢学出身なので、既存の資源を利用して、新しい知識・学問と対応させ、それを理解している。「解剖」は『黄帝内経』に由来し、権威性を持っている。動作行為でも、学科名でも、直接に意味が表せ、ほかの漢字と組み合わせて学科名となる。また、より自然に目的語を支配できる。これらの優れた点があつてこそ、日本人の学者は「解剖」を選び、最終的に「解剖学」という訳語の形成と定着が促されたのであろう。

日本側の歴史を回顧すれば、中国より少し遅れて西洋の解剖学を受容したものの、より早く古典文献から「解剖」の用例を発見し、関連知識を利用しながら、解剖実験と解剖学知識の重要性を論じる。解剖観察及び蘭書翻訳の実践を基礎として、学問を深化させた。最初「解体」と「解剖」とを並立して用い、のちに「解剖」が多用されるようになり、「術」「科」などを加えた言い方を通じて、1830、40年代、「解剖学」という訳語が出来た。幕末には、「解剖」「解剖学」は公の書物に収録され、明治初期に至って、遂に広く使用されている。

#### 四、清末における中日解剖学の交流とそのルート

中日両国における西洋の解剖学受容の歴史を遡り、その基礎的な術語としての「解剖」「解剖」の形成とその定着の過程がわかった。同じ漢字文化圏に属する両国の間では、どのような交流があるか意味深い論題である。前節の考察によって、日本人の学者は古典の漢学知識をよく利用している、ということがわかった。しかし、この時期、中国人学者の研究と日本人の成果双方には何らかの影響はないのか。今日の研究によると、明末清初の際、西洋人の漢訳洋書及びその影響を受けた中国人学者の著述は、蘭学者を初め多くの日本人洋学者などにとって、西洋文化を受け入れるルートの一つであるとされる。解剖学を例としてみれば、研究者は既に前文で言及された蘭学者大槻玄沢が『物理小識』（1643）『医学原始』（1688）などの中国典籍を参照しながら、蘭書の知識を受け入れている、ということが明らかにされた。<sup>78)</sup> それ以降については、全面的な考察が必要であるが、紙幅に限りがあるため、ここでは二種類の作

76) [范] 行準 “「解剖」與「解部」”，328-30頁。

77) 杉田豫「後序」、藤井方亭「題言」、宇田川玄真（1805）『醫範提綱』（卷一）、江戸：青藜閣、葉1a。

78) 陶惠寧（2002）『「重訂解体新書」所引の中国書籍の研究：『医学原始』と『物理小識』について』、『日本医史学会』

品を対象として、この時期における中日交流史の一端を述べてみたい。

#### 4.1 『西医五種』にみる漢訳洋書の東伝

蘭学の展開に伴い、日本人学者はオランダ語を通じ、解剖学の書を大量に訳出することで、直接に西洋文化を学べるようになる。それにもかかわらず、清末に来華宣教師の漢訳洋書が依然として注目されている。そのうちには、前文で論じたホブソンの解剖学・医学作品が確認できる。ホブソンによって編纂された『全体新論』（1851）、『博物新編』（1855）、『西医略論』（1857）、『婦嬰新説』（1858）、『内科新説』（1858）など、いわゆる『西医五種』が世に問われて間もなく、いずれも日本で翻刻され、即ち和刻本が刊行された。なぜ、これらの作品が日本人学者にかくも重視されていたのか。

1859年の和刻本『婦嬰新説』には、安藤桂洲（生卒未詳）という京都の蘭医者による序文があり、その翻刻の縁起について以下のように述べる。

英人合信氏者。醫林之傑也。以其術遊漢土。用漢文著内科婦嬰諸書數十編。蓋欲以變漢醫拘古之風矣。近其門人墨國瑪合淵。至我長崎。贈婦嬰内科二書於福地苟葦。苟葦欲翻刻之。而不能。委之於余。余喜曰。是我邦醫人之幸也。夫漢方家。不讀洋籍。雖讀亦不能通。是其所以斷然無意於此也。今此書既為漢籍。則或有手披目觸之。而由是動取善擇可之念者矣。洋方家固不借之。但亞細亞於西洋。隔絕萬里。風氣水土。服習不同。則醫治之法。不得不從之而變也。今此書既為所試於漢土。則我邦從事於洋方。未有確於此書者也。此二者。非皆醫人之幸乎。<sup>79)</sup>

ここで、安藤は翻刻の際の喜悦の気持ちを表している。その喜びの理由は二つあると考えられる。一つ目は漢文作品のこと。西洋語の分からない日本の医学者でも読み取れるので、医術の進歩を促進できる。二つ目はその内容が中国で検証されていること。東と西で異なる風土、習慣などが異なるため、医療知識も東方の状況に応じたやり方に変えなければならぬ。この作品は中国で既に実証されているため、日本にふさわしいと信じている。この二点はある程度でこの『婦嬰新説』ないし他の漢訳洋書がすみやかに翻刻された原因を示している。

そのほかに、二つの注意点がある。

第一に、安藤の序言によると、ホブソンの『婦嬰新説』及び『内科新説』はその門人「墨国瑪合淵」より長崎にもたらされ、福地苟庵（生卒未詳）に寄贈されたそうである。いわゆる「墨国瑪合淵」はメキシコ人ではなく、米国人マッゴウアン（Daniel J. Macgowan）であるかもしれない。つまり、当時、日中の文化交流を促進した者は両国の学者だけでなく、マッゴウアンのような西洋人もいと確認できる。<sup>80)</sup>

第二に、「解剖」「解剖学」などについて、和刻本から両国の相違が見られている。前述したように、

第48号、155-74頁；同前（2002）「『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究（医書について）」、『日本医史学雑誌』第48号、410-11頁；同前（2004）「『重訂解体新書』の完成と『医学原始』の引用『日中医学』」第19号、28-31頁。

79) 安藤桂洲（1859）「序」、合信著、管茂材撰『婦嬰新説』、平安：天香堂、葉1a-2a。

80) 八耳俊文（1996）「幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観：ホブソン『博物新編』を中心に」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第4号、132頁。

ホブソンは『全体新論』の中で、「割」「剖割」「分割」「剖骸看驗」などの言い方で解剖行為を称し、「全体」で学科名を指している（2.2節）。一方、安藤の序言には「西洋之醫術。解剖以按其實。分析以驗其微」とあり、<sup>81)</sup>「解剖」を称している。ここで、その優劣を問わず、当時の中国では名称が多く統一されていないが、日本では蘭学者の探索によって、「解剖」という使い方は既に世人によく知られている。

『婦嬰新説』の東伝は漢訳洋書の影響が確かめられるが、双方の交流は決して中国から日本への一方通行ではない。中国側がいつ日本を經由し西洋文明を取り入れたのか明確な時期は判断できないが、日本留学ブームが巻き起こってからのことではなく、より以前から少しずつ行われていたそうである。これについて、前文で言及した『全体通考』は確かな証拠である。

#### 4.2 『全体通考』にみる日本語の借用

高氏の論じたように、『全体通考』の中で、訳語「解剖」「解剖学」が十分に使用された事例は下記の三点に表れている。

その一、「解剖学」に対する定義

その二、「解剖」「解剖術」：身体観察方法と技術

その三、外科解剖学（Applied Anatomy）、解剖学技術の臨床運用<sup>82)</sup>

「解剖学」という訳名の源流について、高氏も全面的に考証しており、詳細かつ信頼の高い証拠である。ダッジュンは中国語彙の使用で自分なりの思考や見解を持っている。今の段階では、「解剖学」という言葉が日本語から借用されたということを証明できる直接的な資料はなく、その可能性があるとは言いえない。しかし、もう一種の可能性が存在している。中医典籍から「解剖」という用例を彼自身が発見し、翻訳及び知識の伝播の際に使っていることである。<sup>83)</sup>

グレイ（Henry Gray, 1827-1861）の解剖学の訳者として、ダッジュンの中国語能力は疑う余地がない。翻訳の際、『洗冤録』（1247）や『医林改錯』などと対照しながら関連術語の訳語を制定したことから中医典籍を熟知していたことが伺える。しかし、その解剖作品には『黄帝内経・靈枢経・経水篇第十二』が言及されていない。<sup>84)</sup> ダッジュンは中国の知識術語の根拠、殊に出典へ執着することを知らないわけでない。もし出典を知れば「解剖」「解剖学」の典拠を論証するべきであろう。もちろん、知りつつも利用しない可能性も存在している。しかし、この可能性は非常に低いと考えられる。

事実、この訳作も訳者ダッジュンも中日文化交流のサンプルといえる。この点については、張斯桂（1816-88）の序文及びダッジュンの手元にある日本方面の解剖学文献によって証明できる。

張斯桂は元清国政府の駐日公使館副使（1876-82在職）である。訳者の要求に応じ序を書き下ろした。

81) 安藤桂洲「序」、葉1a。

82) 高晞“‘解剖学’中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，89-93頁。

83) 同上，99-101頁。

84) 同上，99頁。

その序（1884）には日本滞在の期間中、数度「解剖所」に行き、解剖に関する知識を得たことが記されている。従って、その筆の下にみる解剖学知識及び「解剖」という用語は訳者ダッジユンのものではないだろう。<sup>85)</sup>『遊歴日本』『日本国志』などの文献の中で、作者傅雲龍（1840-1901）、黄遵憲（1848-1905）も「解剖」を利用している（「一、先行研究とその問題点」）。この二作の刊行は『全体通考』より遅いが、張斯桂の序と同様、ある社会現象を反映している。即ち、西洋の解剖学の輸入は、必ずしも完全に西洋から直接行われたのではなく、『全体通考』の前に、いわゆる日本ルートが存在している。

訳者の「自序」には、「東洋日本近學西醫獲益良多」とあり、<sup>86)</sup>日本の西洋医学の受容について簡潔な議論しかない。だが高氏の指摘したように、1882年、訳者は日本のグレイ氏の解剖学図譜を持っているのみならず、その内容についても熟知している。翻訳の際、日本語訳を参考したが、『全体通考』の中では日本語訳を採用しなかった。<sup>87)</sup>その理由について、以下のように論じる。

I have before me the entire illustrations of Gray's Anatomy, done by Japanese artists and they leave absolutely nothing to be desired. We could adopt them as they are for China were it not that they contain many Japanese characters, some unknown Chinese ones, and others whose signification or use has changed in China.<sup>88)</sup>

もし日本の図譜に日本語の記号、知らない漢字、及び意味あるいは用法が中国ではすでに変化した字・語が無ければ、使えると論じる。つまり、直接、日本の絵図を使うとは主張しない。術語でも、その態度は大体同じであろう。しかし「解剖」「解剖学」など、日本語の記号もなく、知らない漢字もなく、字面からその意味が推測できる術語についてダッジユンはどのように処置するか。

ダッジユンの論じたグレイ氏解剖学図は『虞列伊氏解剖訓蒙図』である。前文で論じたように漢文引言には「解剖学」という術語が見られる（3.3.2節）。題名は表題紙だけでなく、毎丁の版心にも記されている。つまり、百丁ほどの図譜に、「解剖」は百回ほど登場している。一回しか出ない「解剖学」は見落とされる可能性があるが、百回ほど見られる「解剖」は無視したくても無視できない。

ほかの論説を対照してみれば、訳者は必ずその図譜の内容を熟知していると推測できる。その後の文章では、訳者は中国語訳「脆骨」「胰」と日本語訳「軟骨」「腓」とを比較しており、日本方面の術語を熟知している。<sup>89)</sup>図譜は二冊で百丁の内容があり、松村矩明（1842-77）によって訳製されたものである。グレイ氏解剖学作品の和訳とは、図絵のほかに本文『解剖訓蒙』（1872）20巻がある。ダッジユンがこの

85) 張斯桂（1884）“序”，徳貞（1886）《全体通考》，葉 1b。

86) 徳貞“自序”，徳貞《全体通考》，葉 1b。

87) 高晞“‘解剖学’中文译名的由来与确定：以徳貞《全体通考》为中心”，99-101頁。

88) Dudegon, J. (1882). Review of a New Medical Vocabulary, *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Volume XIII, January-February, p.33.

89) Dudegon, J. (1882). Review of a New Medical Vocabulary II, *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Volume XIII, May-June, pp.178-82. また、ダッジユンは六巻の未刊作品『医学詞彙』（*A Medical Vocabulary*）があり、詳しく中日の解剖学用語を対比したそうであるが、今の所在は不明である。

本文を手に入れたかどうか不明である。もし本文の内容を閲覧していたのならば、より多くの「解剖」「解剖学」などの用例が見えるはずである。この図譜だけ見た場合、その内容を熟知しているので、「解剖」「解剖学」の用例も知るはずである。従って、ダッジュンはグレイ氏解剖学作品を中国語に翻訳した、その和訳版を参考したと確かめられる。「解剖」「解剖学」の用例は独創ではなく、日本からの借用であると考えられる。

その後の状況は大体、高氏の整理したように、鄭観応（1842-1922）の『盛世危言』（約1894）、康有為（1858-1927）の『日本書目録』（1898）には「解剖」が解剖学として使われている。<sup>90)</sup> 同時期の新聞にも解剖に関する記事が見られる。例えば、『申報』にはより多くの用例が掲載されるが、最初の二章は日本と関連がある：

已故子爵相馬誠允……將屍體解剖……

醫科分目五日察驗日解剖日内科日外科日目科<sup>91)</sup>

前後のコンテキストからみれば、両者はそれぞれに解剖行為、解剖学を指している。もし前者をただのニュースや記録とするならば（『蛤州瑣記』）、後者は日本の学校教育を考察する文章であり、いわゆる帝国大学の分科をしていると言える（『日本学校考実』）。注意したいのは、後者の発表は清政府が日清戦争で敗戦し、「下関条約」を調印してから一ヶ月ほどのことである。当時の政府も学者も、敗戦の後、より早く日本のことを考察し始めた。

1916年、「医学名詞審査委員会第一次会議」において、「解剖学」と「体学」が対立したまま、互いに譲らず解決できない状況にあったが、日本とドイツの留学を経験した湯爾和（1848-1940）は『全体通考』を以て、遂に「解剖学」を過半数で確定させた。<sup>92)</sup>

## 五、中日における解剖学の確立

訳語の考察には、一名の確立が重要であることはもちろんである。しかし社会や歴史の背景も無視してはいけない。広くいえば、明末以降いわゆる西学東漸の歴史、本稿の着点から言うなら西方の解剖学の中日両国における伝播とその確立を考える必要があると考えられている。

前文で論じたように、中国は明清の際、既にイエズス会士などの来華宣教師の漢訳洋書を通じ、西洋の解剖知識に接触した。畢拱辰などの中国知識人による積極的な対応、及び探索が見られるが、解剖学が一科の学問として確立されるのはより遅いことである。

18世紀の中葉以降、宣教師によって経営された病院では、解剖学知識の宣伝普及ないし個別の実験が行われている。特に博濟医院1867年及びその後の何件の解剖実験はより早い。しかし、教員の専門知識

90) 高晞 “‘解剖学’ 中文译名的由来与确定：以德贞《全体通考》为中心”，102頁。

91) それぞれ1893年9月30日と1895年5月20日。

92) 醫學名詞審査會 “醫學名詞審査會第一次開會紀錄”，30-32頁。

の素養や伝統観念などの条件的制限によって、死体解剖の実施は少ない。<sup>93)</sup> 1871年、同文館はダッジュンを招請し、医学と生理学の講座を設置したが、正式な時間割表に取り入れず、主に「体骨」、つまり人体の知識を教授したのみで、臨床と実験室の内容はなかった。<sup>94)</sup> 1904年の初め、『奏定大学堂章程』には医学大学の成立という提言があり、その「医学門」には中国医学、生理学、病理総論、内外科、諸科実習及び臨床講義などがあるが、解剖学について、「在国外尚有解剖学、组织学；中国风俗礼教不能，不能相强，但以模型解剖之可也」と称し、<sup>95)</sup> 意見を保留している。19世紀末から20世紀初め、教会団体の資金による独立医学校の出現とともに、解剖教育活動は正式にシステム化される。辛亥革命の後、新式学校が増加したことで、学者は医学校の標準課程を制定するとアピールし始めた。北京医学専門学校学長湯爾和などの推動によって、北洋政府は遂に1913年11月一本の総統文告を公布し、屍体解剖を許可する。その後、内部命令、操作細則を作る。翌年4月、さらに布告が増補される。このように、すべての医学校及び病院は初めて法律上、屍体解剖の権利を獲得し、終に近代的な医学の基礎としての解剖学が中国で確立された。<sup>96)</sup>

江戸時代の日本において、現存の資料には屍体解剖を禁止する規定が見えず、この禁令はないかもしれない。<sup>97)</sup> しかしながら、長く中国文化の影響を受ける日本社会の持っている解剖学への態度も明確である。山脇東洋の『蔵志』が公表されると、守旧の医学者の強い批判を受けた。翌年、真っ向から対立する作品『非蔵志』（1760）が刊行された。ここに当時の世人の解剖実践への態度が伺える。

それにもかかわらず、『解体新書』の開版に従い、蘭学が江戸で隆興し、蘭学者は西洋の解剖文献を翻訳すると同時に解剖実践を行い、実際の観察によって解剖学を探索している。<sup>98)</sup> この過程では別に『内科撰要』（1796）、『和蘭薬鏡』（1820）、『西説医原枢要』（1832）、『病学通論』（1849）など、内科、薬物学、病理学など作品が訳出され、西洋の医学知識を広めている。それこそ、漢方医との矛盾を誘発した。政府も西洋文化が統治を脅かすと心配し、洋書翻訳は次第に政府によって制限されていく。1849年から、幕府は医員が蘭方を使用すること禁止し（外科、眼科以外）、厳しく洋書の輸入及びその翻訳を制限する。いわゆる「蘭書翻訳取締令」である。ただし、その後、緩和される。伊藤原朴（1801-1871）などの蘭医学者が重病に罹る将軍家定（1824-58、1853-58在位）を治療したことを契機として、蘭医が決定的な勝利を収める。しかも、蘭学者による種痘館は、1860年10月、幕府の直轄機構となる。この機構の機能は度々変更され、「種痘所」「西洋医学書」「医学校兼病院」などの名称が示すように、種痘館より種痘、解剖、教授などに拡大し、西洋医学も研究兼教育する機構となった。1865年、オランダの学制をまねて、理化学、解剖学、生理学、病理学、薬剤学、内科、外科など、医学七科を確立した。維新以降、明治政府に接収管理され、この上で改組し、「大学東校」（1869）が建てられる。つまり、今日の東京大学医

93) 張大庆 (1994) “中国近代解剖学史略”，《中国科技史料》第15卷第4期，21-22頁。

94) 高晞 (2009) 《德貞傳：一個英國傳教士與晚清醫學近代化》，上海：復旦大學出版社，257-76頁。

95) 璩鑫圭、唐良彦編 (1991) 《中國近代教育史資料匯編：學制演變》，上海：上海教育出版社，359-60頁。

96) 張大庆 “中國近代解剖学史略”，22-24頁。

97) 石出猛史 (2008) 「江戸幕府による腑分の禁制」、『千葉医学』第84号、221-24頁。

98) 今日では、当時の解剖参観券、解剖図絵（『洋學者稿本集』59-60頁）などの資料が見られる。

学部の前身であり、解剖学が医学専門の必修科目として、日本近代の新式学校で確立されたのである。<sup>99)</sup> 明治前後、東京のみならず、長崎などの地方でも、西洋の解剖課程が行われている。その点について、学者松田氏の整理した講義『人工体普録』などの資料の存在によって証明できる。<sup>100)</sup>

## おわりに

「解剖」「解剖学」の訳名の形成とその確立には長い歴史が存在する。その過程の中で、日本より中国のほうが早く西洋の解剖学に接触し、宣教師及び中国人学者による漢訳洋書は日本人の学者が西洋の解剖学を取り入れるのに積極的な役割を果たした。日本では、蘭学という学問体系が形成されるが、蘭書を翻訳した際、伝統的な漢学知識を繰り返し用いている。

「解剖」「解剖学」といえば、日本はより早く「解剖」を発見し、「解体」のような術語も使われたが、最後に「解剖」に定着した。遅くとも1840年代の資料には既に「解剖学」の語が見られる。幕末明治初期、「解剖」「解剖学」は次第に普及し、解剖学も大学に導入された。一方、中国では、「全体(学)」「体学」などの言い方があったが、日本の訳語「解剖」「解剖学」を選定した。この訳名はグレイ解剖書の和訳によって日本から中国にもたらされた。来華宣教師が中国語訳『全体通考』を訳した際、和訳版の図譜『虞列伊氏解剖訓蒙図』を参考にしたことを確認することができた。

西洋人の宣教師、中日学者などの努力によって、西方の解剖学及び関連した概念が東方にもたらされた。学者の間では、地域、文化、時代などの制限があるが、西学東漸の潮流の中で、東西だけでなく、同じ漢字文化圏に属する中日の間でも相互の交流が行われていた。西洋の解剖学を目の前に、各学者は伝統的な文化資源から根拠を探し、次第に人体解剖の禁忌を突破し、中日などの東方国家に近代の解剖学を確立させたのである。

謝辞：拙稿の主体部分は「書写中国翻訳史：第七届中国訳学新芽研讨会」（2014年12月18-19日、香港中文大学翻訳中心）で口頭発表したものである。会場では、中央研究院黄克武研究員などの評論員の先生及びほかの方々から批評意見をいただいた。執筆中、関西大学沈国威教授、復旦大学高晞教授、京都大学名誉教授松田清先生、北京大学陳明教授、孫建軍教授、中央研究院張哲嘉研究員、関西大学非常勤講師二ノ宮聡先生、北陸大学講師伊伏啓子先生など、温かく指導くださった。謹んで感謝の意を表したい。

99) 大槻如電原著、佐藤栄七増訂（1965）『日本洋学編年史』、東京：錦正社、524、599、622、633-34、668-69、701、717頁。

100) 松田清（2007）「資料翻刻：小城鍋島文庫所蔵『人工体普録』」、『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』第1号、78-134頁。

